

メディア・コンテンツを応用した医療の教育ツールの 学習効果および評価指標に関する研究

【代表者】

山口悦子 大阪市立大学 医学研究科 准教授

【共同研究者】

丁子かおる 和歌山大学 教育学部 准教授

掛屋弘 大阪市立大学 医学研究科 教授

金子幸弘 大阪市立大学 医学研究科 教授

【研究概要（申請書より抜粋）】

芸術の手法を応用するアーツ・ベースド・ラーニング（ABL）は、学習者の感性に訴えかけるため効果が高く、海外では医学教育や病院職員の教育にも取り入れられ、詩作、物語、演劇、絵画などの実践が報告されている。一方、わが国では、看護学科で芸術を応用した教育が行われている事例がある¹が、医学生や病院職員、患者への教育としては少数の病院で行われた報告があるのみである²。ましてやメディア・アートに関する実践報告は少なく、学習効果の測定および測定のための有用な指標も明確ではない。一方で研究代表者等は、これまで医療分野の ABL の学習効果に関する研究を行っており、メディア・アートに関してはアニメーションを活用した教育プログラムがコミュニケーションの改善に有効である可能性や、キャラクター・イラストを用いた患者指導が業務効率と学習効果を高める可能性、またゲームを用いた医療安全管理マニュアルが学習者の理解度を高める可能性等を示唆した。そこで今年度はこれまでの研究成果を踏まえ、アニメ・ゲーム・キャラクター・マンガ等のメディア・アートを応用した医療安全の教育コンテンツを学生・職員・患者の教育に取り入れて学習効果を測定するとともに、その評価に有用と考えられる指標を探索する。

¹関西医科大学看護学科と京都造形芸術大学 舞台芸術学科とのコラボレーション。

²倉敷中央病院、佐久総合病院などで演劇による教育を行っている。